

## 幼児の身体表現における模倣の意味 — 物語展開過程における検討 —

鈴木 裕子

### 1. 研究の経過

「幼児の身体表現あそびにみられる物語展開の過程」<sup>1,2)</sup>の一連の研究では、幼児が身体表現あそびのなかで表現する過程を「からだで物語る」と捉え、身体表現の特性を確認しながら、その様相を分析することを試みた。

そこでは、幼児が身体表現あそびのなかで物語をつくり出す過程を「物語の発端」「物語の展開」「物語の展開をひろげる」の3部分に分けて分析考察を進めた。

「物語の発端」部分で、からだや動きを通して空想の世界に入り込む要素が必要であり、「物語の展開をすすめる」部分では、個々のからだや動きの意識を越え、その場の空間を場面としてイメージする要素、「物語の展開をひろげる」部分では、からだの形や動きが、表現対象に似ているという次元を越えて、その場の事象や現象に意味を付与する要素が必要であるという考えを述べた。

次いで、これらの物語展開過程3部分の図式化を試みた。この図式は、質的なデータの具体的で固有な部分を認めながら、一定の一般性を表示できるものとして、子ども達が物語る過程の解釈に利用できると考察された。

その後、図式に適応させて事例を解釈し分析する試みを通して、物語る過程のなかでは、子どもたちは、まず、自分や他者のからだや動き、それを取りまく空間を何かに「名づけ」、その後の一連の文脈のなかでイメージと結びつけ、「意味づけ」で動くというプロセスがあることがわかった。

さらに、イメージの変容のプロセスでは、子ども一人ひとりの対象への独創的な問いかけがきっかけとなり、からだを通して他者と交流する感覚がイメージの膨らみを支え、そこでは、ことばの背後にある動きのリズムが媒体となっていることも見いだされたのである。

### 2. 研究の動機及び目的

本研究では、特に身体表現場面における幼児の模倣の行為に着目してみたい。なぜ模倣なのか。

これまでの物語展開の分析において、子どもにとって模倣という行為が、何らかの情報をコピーしながら、それを加工したり、生まれ変わらせたりして独自の表現を生成させる力となることを様々な場面から読み取ることができた。乳幼児の発達段階において、模倣の意義は大きい。よちよち歩きをはじめたばかりの子が、テレビを見ながら、見よう見まねでダンスする姿は、大きな喜びを持って受け止められる。模倣は創造の源であるといった理念は概ね了解されているが、一方で年齢を高くしていくにつれ、“人の真似ばかりしている子ども”の状況をプラスには評価しにくい。

筆者は、実際の保育場面で、一人の保育者が「自分で思いつかなかったらお友達の真似をしてもいいよ」と言葉がけたことを巡って、その後、園内で模倣の解釈や援助方法への悩みを討議する機会を経験した。その話し合いは、真似する子は、どうして真似をしているのかの解釈の仕方に始まり、保育者は見本を見せていいのか、保育者は子どもにとってどのようなモデルであるべきかという援助の視点にも及んでいた。

人の発達における模倣の段階は、ピアジェなどの理論に見られるように、かなり明らかにされている。しかし、身体表現という一連の行為のなかでの模倣の意味をとらえるためには、模倣という行為を詳細に捉え、模倣がもつ力を明らかにする必要があると感じられた。近年、描画表現における幼児同士の模倣に着目し、その類型を明らかにする研究も行われている<sup>3)</sup>。そこでは、幼児にとっての模倣は、描画に向かうための自己解決の道、表現ツールやスキルの開拓、遊びのツールとしての効果があることが示されている。

そこで本研究では、身体表現あそびのなかで幼

児が物語る場面の観察から、幼児にとっての模倣の意味を考え、模倣のパターンを明らかにすることを目的としたのである。

### 3. 幼児の身体表現における模倣

ここでは、幼児期の身体表現あそびにおける模倣の捉え方や扱いについて整理しておきたい。

柴<sup>4)</sup>は、動きの表現の活動は、模倣表現と創造的表現に分けられ、模倣表現とは日常的・慣習的な動きを用いての表現であり、誰もが同じような表現をすると述べている。さらに、模倣表現には、同一の題材に対して、保育者や友達の動きをそのまま模倣する低次の段階と、同一の題材に対して、いろいろなイメージをとらえ、イメージに相応しい動きを選択して表現する高次の段階があるとしている。高次の模倣は、創造的活動の要素を含み、模倣表現と創造的表現の間に明確な境界線がないことを述べている。

類似した見地として、阿部<sup>5)</sup>は、幼児の身体表現が発達していく過程を、模式的表現と創造的表現に大別している。模式的表現は、日常的、慣習的な動作の模式的な要因が強く働いた表現であり、3、4歳児に多く見られ、一般的には創意性の強まりと共に減少するが、より高次の表現を見いだそうとする試みのなかでは、繰り返し表れ、表現力を高めるための行為であると述べている。

井上<sup>6)</sup>は、表現のきっかけという観点から、そこには表出と再現の二要素が存在するとし、再現という要素の行為として、模倣を説明している。

藤善<sup>7)</sup>は、子ども同士のまねごっこという行為が、自分以外の考えがあるということを知る格好の機会であるとし、お互いに真似することによって、自分の考えが刺激され、高度な思考を生み、

動き方も、より新しいもの、複雑なものへと発展していく契機となるとして、身体表現における模倣遊びの方法を提案している。

このように、幼児の身体表現遊びにおける模倣については、多くの著述があり、模倣を創造への第一歩として肯定していることが概念的には再確認できる。しかし一方で、その模倣がどのように行われ、創造的な行為としてどのような意味を持っているのかを具体的に追究した研究が少ないことも確かである。保育者は、模倣の意味を感覚的には了解できるが、実際の援助となると戸惑いを覚えるのである。

古市<sup>8)</sup>が、幼児がダンス学習する際の模倣の過程を実験調査によって捉え、指導の手掛かりの方向性を示した研究を行っていることは興味深い。しかしながら、そこでは、教師の示したダンスを模倣する動きの習熟過程を明らかにすることに焦点が置かれており、子どもたち同士の模倣を、ここからだの相互作用として文脈のなかで捉えたものではない。

そこで、本研究では、身体表現で物語を展開する場面に表れた模倣を抽出し、その模倣の意味を解釈することで、子どもたちの身体表現活動への援助の手掛かりを求めたい。

### 4. 研究の方法

#### 1) 期間と対象

1997年10月～2005年7月の期間に愛知県内の私立幼稚園3園、公立保育園2園で、筆者及び担任保育者が実践した身体表現あそびの保育のVTRや記録、保育者からの聞き取りを中心にした事例をもとに考察を進める。



写真1-1, 2, 3 身体表現あそびの1コマ

## 2) 事例抽出の枠組み

身体表現あそびの物語展開過程で出現した行為を「模倣」と捉える枠を、一人の子どもが、他の子どもの動きを真似していると思われる現象と定義し事例を抽出した。広義には、その場にはない対象を遅滞して表すことも創造的な模倣であるとの解釈もできるが、今回は模倣対象として他児（以降、模倣対象児と称する）の動きが確認できることを条件とした。

## 3) 分析の観点

模倣を行った子ども（以降、模倣する子と称する）の分析は、真似した動き（フォーム、リズム、空間）の特徴とその後の変容に観点を置いた。各事例では、これらの観点に関わる部分に下線を記した。

## 5. 結果と考察

### (1) 模倣のパターン

抽出された事例の特徴を検討し、分類を試みた結果、身体表現場面で出現する模倣は、以下の 4 タイプに分類することができた。

表 1 幼児の身体表現における模倣のパターン

パターン 1	動きはじめのきっかけやタイミングを求める場合
パターン 2	動きをなぞらえたり、やりとりして楽しむ場合
パターン 3	自分の動きやイメージを意識する場合
パターン 4	自分にはないイメージや動きのアイディアを取り込む場合

### (2) 模倣のパターンの特徴

幼児の身体表現における模倣の 4 つのパターンについて、主な事例の考察から各パターンの模倣の特徴を、図と合わせて述べることにする。

#### ① パターン 1：動きはじめのきっかけやタイミングを求める場合

##### <事例 1>

2003. 11. 7 「からだ」

R 幼稚園年長クラス

活動のはじめの部分の、「背中はどこかな？」など、からだのいろいろな部分をさわったり動かしたりする遊びのなかで、A 子は保育者の言葉がけを聞くと、右隣に立つ B 美のするのを見て、B 美の動き出しからワントンポずらして、同じような動きをすることを繰り返した。子どもたちが遊技室に広がりはじめ、B 美と離れた後には、その行為はなくなった。

##### <考察>

A 子は、B 美の真似することによって、自分の動き出しのきっかけを得ている。模倣対象は特に印象的で独創的な動きである必要はなく、模倣している子も対象の動きそのものを表現の情報として取り込んでいるわけではない。



写真 2 動き出しのきっかけやタイミングを求める

### <事例 2>

2001. 11. 29 「そしたらそしたら」<sup>9)</sup>

\*「そしたらそしたら」の絵本<sup>9)</sup>をもとにした身体表現あそび

R 幼稚園年中クラス

「はい、とっぽーん」という保育者の声と、魔法の鈴の音を聞いた子どもたちは、各々ビーズになり丸まって床をころころと転がり始めた。C 子は立ったままじっとしていたが、目の前の D 子と E 子が身を縮めてハイハイした後、横転するのを見て、恐る恐る前方へ倒れながら足をまっすぐに伸ばしたまま、ゆっくりと横転しはじめた。

### <考察>

C 子は動き出すきっかけを、目の前の D 子と E 子が動くタイミングに求めている。模倣対象児 2 人の動きは単純で真似しやすい。

### <事例 3>

2001. 7. 18 「ありさんは、みんななかよし」

R 幼稚園年中クラス

指導者の「みんな、ありさんが穴からでてきたね。」の言葉を受けるように、子どもたちは大騒ぎしながら、順番に保育者の持っているフープをくぐっていく。子どもたちは、ただ前の子について這って歩いている状態になる。「ぶつかるから、いやだ」「早くいって」などの小競り合いが始まる。K 男が、前を行く S 男の脚を引っ張って背中に乗りかかる。すると、その後ろの H 男が自分の前を行く X 男に同じことする。前の子に乗りかかる子が現れだし、だれともなく動きが止まり、座り込む子や寝そべる子も現れる。

### <考察>

この事例では、一人の子の動きが、動き出しのきっかけにはなっているが、次の展開にはつながっていない。模倣して動いてみたが、イメージに結びつかず、物語が繋がらなかった事例である。

### <模倣の特徴>

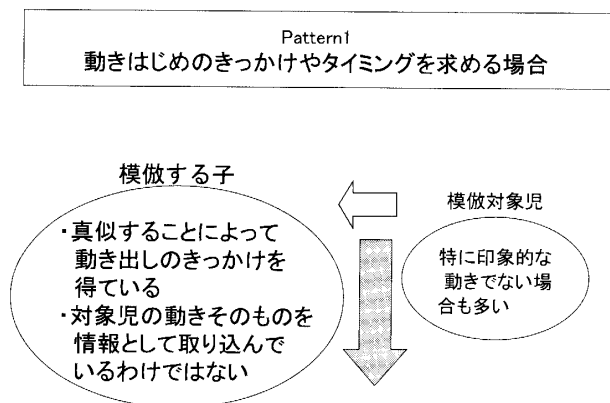


図 1 模倣の特徴 (P1)

パターン 1 の場合、模倣する子は、真似することで動き出しのきっかけを得ている。模倣対象となる子の動きは、フォーム、リズム、空間の使い方が、特に印象的ではなく、むしろ単純な動きであることが多い。模倣する子は、特に模倣対象児の動きそのものを情報として取り込んでいるわけではないと解釈できる。

動き出すきっかけを得たことをもとに、イメージが想起されていく事例 1 のような場合もあるが、一方で事例 3 のように、模倣した動きがイメージ想起に結びつかないという事例もみられた。この場合には、一人ひとりの子どもはイメージが持てないために、幼児間で動きがとりとめもなく模倣されていく傾向がみられた。模倣をする要因が、指導者の動機づけの不足や不適切さにあり、イメージが想起されず、動きのアイディアが生まれていないことが推察された。

動きを模倣することは、動き出す動機をもとに、イメージ想起への意欲を導く力を持っていることが解釈できる。そのことから、模倣は悪いことではないけれど、保育者の言葉がけや模倣対象児の動きが、必要以上に「お手本」の役割を担っていてはいけないことも示唆される。

## ②パターン 2：動きをなぞらえたり、やりとりして楽しむ場合

### <事例 4>

2001. 11. 29 「そしたらそしたら」<sup>9)</sup>

#### R 幼稚園年中クラス

周囲の子どもたちが次々と思ひ思ひのビー玉になり、小さく丸まったり転がったりするなかで、A 男は動く様子もなく、すぐ近くに立つ保育者に寄り添っていた。保育者が A 男の近くから離れると、自分の横で正座し丸まっている B 男をみつけ、後ろから肩に手を回し抱きついた。後ろでは、男児が次々に集まり上に重なりあっていた。A 男は B 男から手を離し、そこに走り寄って一緒に重なった。次に保育者の「G 子ちゃん、あんなどころまでいっちゃったね。」というのを聞くと、G 子に笑いかけながら嬉しそうに走って、G 子の近くに行き、G 子が坂を下るビー玉のように転がっているのを見て、ごろごろと横向きに転がり出した。

#### <考察>

模倣対象児の近くで、その子の動きをなぞらえて一緒に動くことを楽しんでいる。模倣対象の動きの質を取り込んでいるわけではない。



写真 2 動きをなぞらえたり、やりとりして楽しむ

### <模倣の特徴>

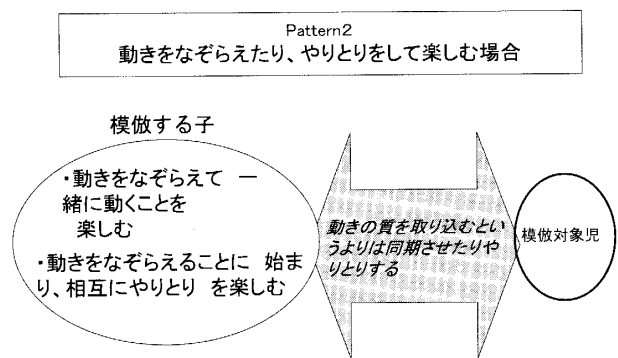


図 2 模倣の特徴 (P2)

### <事例 5>

1997. 10. 17 「おいも」

#### F 幼稚園年長組

I 子は、おいもを食べるふりをする H 美に近づいていき、同じように両手で口を押さえるようにして両手を動かす。その後、2人で顔を見合わせるようにして同じリズムで両手を動かす。次いで H 美は I 子の身体をおいもに見立てて、I 子の身体に触りながら食べる真似をすると、I 子も同じように動く。2人はそれを繰り返す。その後、別の動きの場面でも 2 人のやりとりは行われた。

#### <考察>

おいもを食べるというストーリーの展開を支えているのは、言葉よりも身体の動きのやりとりである。同じ動きや同じリズムを共有することが、イメージの共有に結びついている。

模倣対象児と模倣した子どもとの間が動きをなぞられて相互にやりとりを楽しんでいる。動きのやりとりをもとにした遊びに発展したようだった。

模倣する子は、模倣対象児の動きをなぞらえて一緒に動くことを楽しみ、さらにその行為が相互のやりとりになっていく場合もみられた。

事例 5 では、おいもを食べることを、動きとリズムを同調させ、向かい合ったり、からだを触れあわせたりして、模倣というよりは、模倣という形式を利用して、ある種の遊びをつくりだしたように見えた。

現実と想像の世界の扉を一瞬にして開き、自由にやりとりさせることのできる幼児の特性が強く現れた状況である。模倣という概念を、このような行為にまでひろげて考えてみることも必要なのではないかと考えられた。

③パターン3：自分の動きやイメージを意識する場合

<事例6>

2001. 11. 29 「そしたらそしたら」<sup>9)</sup>

R 幼稚園年中クラス

絵本をひろげて「これは、なあに？ すってんきりんだね」という保育者の声と鈴の音とともに、子どもたちは、きりんになって各々ひっくりかえる。J子は、少し周囲の様子を伺いながら、背中を床につけて足をそとと垂直にあげて転ぶ。すぐ横でC男が足を曲げて、ごろんと横向きに転がりながら移動すると、それを見たD男が後を追うように同じように転がる。J子は伸ばした足を曲げて試すように2人と同じ動きをする。その次に、保育者が「もう一度、すってんきりん！」と言うと、J子は、はじめに自分が行った動きを膝をまっすぐに伸ばして、周囲を伺うことなく、すぐさま行う。

<考察>

他児の動きを観察して模倣して動くことによって、自らの身体感覚を明確にし、気持ちを呼び起こし自分のイメージをはっきりさせていくプロセスとして読み取れる。

<事例7>

1998. 12. 8 「紙」

F 幼稚園年長組

保育者の「紙に変身～」の言葉がけを受けて、I子は両手を広げてうつぶせに寝転んだ。その後、近づいてきたH男が脚を広げて腰を落とした姿勢をしているのを見て、急に起き上がり、同じような姿勢をとる。保育者の「風が吹いてきたら紙ってどうなった？」という言葉がけを聞くと、まわりの子は「飛んでくよ！」と言いながら、くるくると回る。I子は腰を落としたまま、その場でくると2回自転する。H男が大きく遊戯室に円を描くように走るのを見て、周囲の子もそれに続く。I子は、上半身を床に平行にさせるように腰を屈め、両手をしっかりと広げてその中に走り込んでいった。

<考察>

I子は、周囲の子の表現を見て、いろいろと模倣をしているが、自分なりのイメージを持っていないわけではない。いろいろな動きを体感することによって、自分のイメージを確認しているようであった。この流れの最後には、最初の自分の動きに戻っている。自分の動きが自分のイメージに一番ぴったりとしていることを確認したプロセスとして模倣が行われたと捉えられる。



写真4 自分の動きやイメージを意識する

<模倣の特徴>

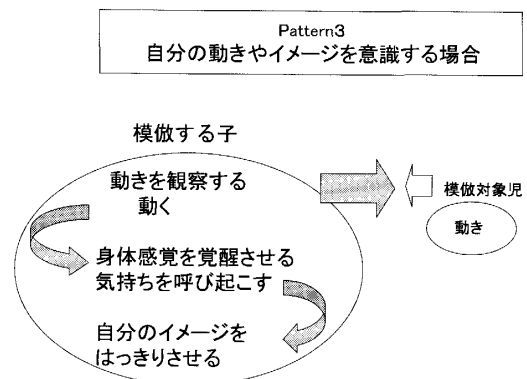


図3 模倣の特徴 (P3)

パターン 3 の場合の模倣する子は、模倣対象児の動きをよく観察して動いている。その様子は、動くことによって、身体感覚が覚醒し、自分のイメージを呼び起こすようであった。

そして、そこでは、子どもたちの気持ちが大きく作用しているようである。気持ちとは、多くは楽しいとか嬉しいといった素朴な感情であるが、そのような素朴な感情がイメージをより豊かに膨らませていると思われた。動いて表現していることを“楽しい”と感じる気持ちによって、子どもたちは自分のイメージをはっきりさせていくように読み取れた。模倣には、子どもたちの素朴な喜びの気持ちを喚起させる力があるのだろう。

#### ④パターン 4：自分にはないイメージや動きのアイディアを取り込む

##### <事例 8>

2001. 11. 29 「そしたらそしたら」<sup>9)</sup>

##### R 幼稚園年中クラス

C 子は、保育者の「F 菜ちゃんがあんところ転がっているよ」の声を聞いて顔を上げる。かなり離れたところにいる F 菜の、膝を抱えて小さくなり左右に転がる様子をじっと見つめる。C 子は、F 菜のように膝を曲げ、しっかりと身を縮めるようにして転がり出した。

##### <考察>

模倣する子は、保育者の言葉がけに促されてかなり離れたところである遊技室の端にまで視線を写して模倣対象児の動きを観察し、動きのアイディアを取り込んでいる。本事例での C 子の場合、独自の表現にまで至っていないが、かなり明確に意識して自分の動きを行っていると思えられた。

##### <事例 9>

1998. 12. 8 「紙」

##### F 幼稚園年長組

顔だけを上げてうつぶせに寝ながら、周囲をながめていた K 子は、保育者の「風が吹いてきたら紙ってどうなる？」という言葉がけを聞くと起きあがり、両手を広げて立った。保育者が動きを誘うようにピアノを弾くと、円を描くように両手を広げて走り出した。その前で L 子が両腕を鳥のようにゆっくり羽ばたかせるように走っているのを見て、L 子と少し距離を保ちながらも並行してかなり正確に同じように両腕を動かす。しかしその後、広げていた両腕を左右交互に上下させて斜めにしながら走った。ピアノの音が終わると、ほとんどの子どもはうつぶせになって床に寝たが、K 子は両手を広げたまま片膝を立ててしゃがみ、平らな紙を表していた。

##### <考察>

本事例の K 子は、L 子の動きと観察し模倣することによって、自分の動きにはなかった表現の仕方に気づき、新たなアイディアやイメージが生まれている。K 子にとって積極的な情報の取り込みと捉えられる。このような模倣の場合、模倣する子は、すでに自分自身の動きを行っていることが前提となるようであった。

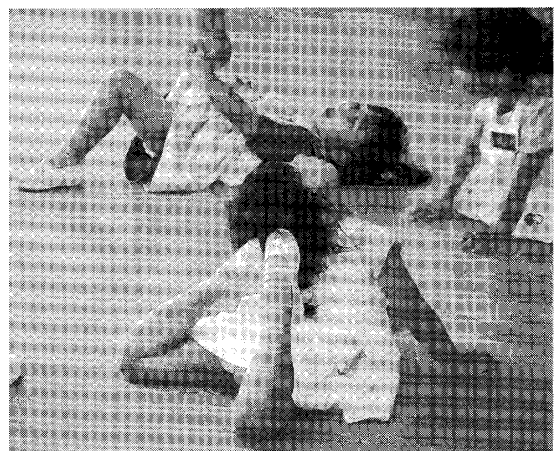


写真 5 自分にはないイメージや動きのアイディアを取り込む

## <模倣の特徴>

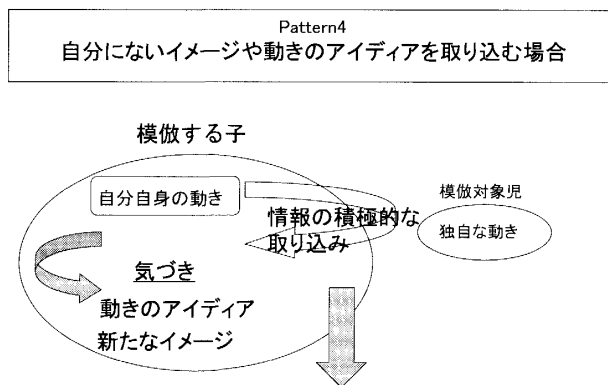


図4 模倣の特徴 (P4)

模倣する子の入り口の状況はパターン3とよく似ており、模倣する子が、模倣対象児の動きをよく観察し、模倣して動くことによってイメージを想起させている。異なっているのは、模倣対象児の動きの多くが、フォーム、リズム、空間の使い方など、かなり独自でユニークであることだった。模倣する子は、その動きをかなり積極的に観察し、情報を取り込もうとしている。

その結果、事例8のように、まず模倣対象児の動きを模倣して動いてみる場合もあるが、事例9のようにすでに行っていた自分の動きを意識し直すように、模倣対象児の動きをアレンジする方向で、情報の一部を動きのアイディアとして取り込んでいる場合もあった。

それによって、模倣する子の動きは、独自の表現にまで至らなくても、かなり意識された表現になったり、さらには模倣対象児にもなかった独自の表現へと発展する場合がみられた。

## 6. 模倣の効果と援助の視点

幼児の身体表現における模倣には、次のような意味が含まれていることが示された。

- 1) 動きははじめのきっかけやタイミングを求める。
- 2) 動きをなぞらえたり、やりとりをして楽しむ。
- 3) 自分の動きやイメージを意識する。
- 4) 自分にはないイメージや動きのアイディアを取り込む

この4つの模倣のパターンは、1) から4) へと高度になり、より創造的な段階に向かうとみなすよりも、保育者側からすれば、独自の表現を促

すための援助方法に違いは必要にはなるが、いずれのパターンもまずは創造への力になることを認める視点が必要であると考えられた。子ども一人ひとりの身体を通して、無理強いされことなく動機を高め、自己を確認し、さらに自己を高めていくという、子どもたちにとって何者にも代え難い体験であると理解し、個別のケースのなかで模倣の意味を深く解釈することが望まれる。

生田<sup>10)</sup>は、日本の伝統的な「わざ」の習得の大きな特徴として、弟子は、師の「わざ」に固有の「形」を、「模倣」することから、「わざ」の習得を出発する点を挙げている。佐伯<sup>11)</sup>は、師の側からすれば、この「見せて真似させる」行為は、「参加への引き込み」であり、「演じようとする」活動全体への「共感」の呼びかけであるという見方を示している。

斉藤<sup>12)</sup>は、生きるために必要な三つの力の一つとして「まねる盗む力」をあげている。まねる力は、生きる力の基本であるとして、身体と身体のかいだの想像力、間身体的想像力というべき力の重要性を説いている。「型にはまる」という言葉を否定的な意味に捉えずに、型を身につけることによって、様々な状況への対応ができるようになるのであり、その型を身につけ自分流にアレンジする過程において、まねる盗む力が必要になるとしている。そして、まねる盗む力を、近年の日本の教育が見失った代表的な力であるとも述べている。

模倣の持つ意味を捉え直す作業は、現代の教育に大きな示唆を与える。模倣は、創造の第一歩である。自分の身体に他者を引き込むことは、自分を作り上げる第一歩である。その作用が自然に見られる幼児の身体表現の場において、模倣の意味を捉えなおし、その力を認めていくことは、現代社会の子どもたちの問題の解決に直接的に迫るものとなるだろう。本研究は、その道筋の第一歩である。

## 7. 今後の課題

本研究の考察において、身体表現の場面において、模倣対象児と模倣した子の関係は、必ずしも日常の友人関係に強く依存していないということを担任保育者が指摘した事例が多くあった。例え



ば、日常の生活のなかで、いつもリードする側の子とされる側の子の関係が逆転していたり、あまり関わりをもっていない子の間で、模倣の関係を築いていたりする場面が多く見られたのである。興味深い指摘であった。今後は、このような子どもの関係性の観点をふまえた分析をすることで、模倣のもつ意味をさらに具体化できるのではないかと考えられた。

また、幼児が他者の動きを模倣する能力、特に動きを正確になぞる力というものの個人差が、これらの4つパターンの出現と関係があるのかを明らかにすることが、個別のケースを解釈し支援するために必要な基礎調査になると考えている。

### 【引用・参考文献】

- 1) 鈴木裕子 幼児の身体表現あそびにみられる物語展開の過程 名古屋柳城短期大学紀要第24号 2002
- 2) 鈴木裕子 幼児の身体表現あそびにみられる物語展開の過程(2)―図式の適応とその利用― 名古屋柳城短期大学紀要第25号 2003
- 3) 奥美佐子 幼児の描画過程における模倣の効果 保育学研究第42巻第2号 日本保育学会
- 4) 柴紘子・柴真理子 動きの表現 星の環会 1981
- 5) 阿部初代 幼児の身体表現 清水印刷 1985
- 6) 青山優子・井上勝子他 からだによる表現 ぎょうせい 1993
- 7) 藤善瑞子他 こどものための動きの表現 不味堂出版 1990
- 8) 古市久子 幼児におけるダンス模倣の過程について 大阪教育大学紀要第IV部門 第46巻第2号 1998
- 9) 谷川俊太郎 そしたらそしたら 福音書店 2000
- 10) 生田久美子 「わざ」から知る 東京大学出版会 1987
- 11) 前傾書 10) 補稿：佐伯ゆたか
- 12) 斉藤孝 子どもに伝えたい<三つの力> 日本放送出版会 2001

## The Meaning of Imitation in Preschooler's Body Expression

Suzuki, Yuko\*

The purpose of this research is to investigate the meaning and effects of imitation in preschoolers' body expression. In our previous researches, we considered how preschool children create stories in a body expression play. Through these studies, it had been shown that imitation helps the development of the ability to create original expressions. We analyzed the cases and classified the patterns of imitation. Imitation of preschoolers during body expression could be divided in four patterns. (1) A child is seeking the chance and timing to begin moving. (2) A child enjoys mimicking some movement and, through it, communicating with other children. (3) A child is self-conscious of his movements and image. (4) A child is taking in an image or an idea of a movement new to him. It seems appropriate to not judge one of the four patterns as superior, but to understand that all four serve as a starting point for creative expression.

キーワード：幼児 (preschool children), 身体表現 (body expression),  
模倣 (imitation), 創造性 (creativity)

---

\*Nagoya Ryujyo (St. Mary's) College